

先可有御會之由、納言被申之御移徙以後、四韻詩未被展席、仍此事先日予所申出也。十八日可有御會之由議定、納言詩題州縣春光遍題中各可催文人之由有仰更闌退出、十六日丁卯參殿下○中曲水宴事有評定草整事偏難被逐內宴之例私宴也、又公卿以下著直衣已非禮儀遊興也、只牙象草整上被敷色々唐綾緜可宜之由中山入道殿下令計申給、即彼御札下給見之寬治被用法性寺草整、舞臺草件草整卽牙象中山殿令計申給之旨尤可然之由申內宴草整自納殿被取出之大臣紫大納言縹中納言欵冬地黃文以丹畫之已上其色輪子ガヘテ畫參議並文人黃地體用桶如鼓仰云參議與文人無差別不得心保元文人民部卿入道親範奉行也此色就何文令分別哉之由雖有御尋文書燒失之由申之不明歟

〔一代要記土御門〕建永元年二月廿八日熊野本宮燒失之由三月三日風聞今日於中御門殿可有曲水宴而依此事延引來月平三月七日攝政良經頓死三十八

〔夫木和歌抄

五月三日〕百首御歌遊宴

書とめしはの字に波や結ぶらん絶にし道をとをりはてねば

慈鎮和尚

あはれともけふこそ桃の花ざかみかみのみのひと誰さだめん

此二首御歌詞云曲水の宴は我國には顯宗の御ときはじめられりいゑ○藤原氏には寛弘寛治いみ

じき事になん申つたへたれどその後はきこえぬを道を得たまへる玄るしにおこしをこなはんとて文人伶人申さだめてすでに三日○建永元三月とて侍りしを熊野火事二日ゆふべにきこえし物を詩句はいたづらに文人のこころにおさまり拍子はむなしく伶人のたぶさに残りて神なり又神なりともいはず夢きかぬにあらざるかとのみおどろくどころまことにたましるをたつかだちとなりて心をまよはすかぎりに侍りけれど云々